

『夢の話』

聖華

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヴィルヘルムからの依頼で、闇に侵された物語世界の調査をすることになったハンス。マグス・クラウンの力を借りつつ調査を進めていた彼は、ピーター・ザ・キッドからこの街で起こっている事件について聞くことになる。

子どもたちを攫っている犯人は誰なのか？ 彼らを襲うナイトメア・キッドの真意とは？

——それは、とある誰かの小さな『夢の話』。

書け描けフレマより『夢の話』というお題。

捏造設定、自己解釈、オリジナルヴァイラン、設定資料集のネタバレを含みます。

目次

第1章	道化師、現われる	1
第2章	失われた本	9
第3章	いざ、探索へ!	16
第4章	視点が飛んで	27
第5章	本当にあったナイトメア	43
第6章	ウエンデイの小さな不安	59

第1章 道化師、現われる

「つ、——」

青年はレンガ塀に背中を強かに打ちつけられて、呻き声を上げた。長い睫毛で覆われたピンクの虹彩が、痛みに歪む。

倒れこんだ彼の前には、肩を露出させたいかにもガラの悪い男が三人。青年の肩を突き飛ばした一人が、スーツの胸倉を掴み上げた。地面に着かなくなった足がぶらぶらと揺れる。

「ちよ、ちよつと、いきなり暴力に頼るのは良くないと思うんだ……っ！」

ズレてしまったモノクルをくいと元の位置に戻しながら、青年は抗議する。

とはいえ、そこは背の高い建物に囲まれた、汚れた裏路地だ。昼間だというのに薄暗く、周りにあるのは大小様々なゴミの山。彼の言葉に賛同してくれる人間が居る訳もない。胸倉を掴む腕の力が強くなると、青年はますます苦しげに息をする。

大男は唾が飛ばす勢いで、青年に食ってかかる。

「テメエ、自分が何をやったのか分かってんのか、ああ、？」

「うーん……？ 子ども相手に大人げないことをしているキミたちを咎めた、かな？」

そもそもあんな風に道に広がって歩いていたら、子どもじゃなくても間違つてぶつかるよ」

「どうやら自分の置かれた状況を、まあだ理解してねえみてえだな？」

首を傾げる青年の体が、再びレンガの壁に叩き付けられ、固定された。そのまま大男は、刺し込む光を遮るように、丸太のような腕を振り被る。周りを囲う取り巻きの下品な笑い。

ここには、彼ら以外に誰も居なかった。だから、誰も気付かなかったのだ。男の形をした影の中、桃色の虹彩が妖しく輝いたことに。

「流石に、厳しいかなあ……頼んでいいかい、『マグス^{ボク}』」

そう一言。宙吊りにされたまま、青年は頭に被ったシルクハットの鏢を掴んで、大男の視界を遮るように大きく振るった。途端、振られたシルクハットの残像から無数の蝶が湧いて、大男の顔目掛けて飛び立つ。周りに居た男は異常を察して咄嗟に加勢しようとするが、今度は青年の足元からも蝶が大群と化して吹き出したもので、堪らず足を止めた。

路地裏の全てが、光り輝く蝶に沈む。蝶の羽搏く音が、狭い路地に反響して、鼓膜を叩いた。

「ッ!? ちつ、妙なマネを！」

無数の蝶に群がられ、大男は一瞬たしかに怯んだ。それでも気にせず、青年が居た場所に拳を振るおうとして、

「——おっと、お触りはご遠慮頂こう」

しかし、蝶の中から伸びてきた笛が、その側頭部を殴りつける方が早かった。鈍い音。子ども程の大きさはありそうな鈍器で殴られれば、流石の巨体といえど堪えたらしい。よろめくと同時に「グッ……ッ!？」と悲鳴を上げて、服を掴む腕を完全に離れた。自由になった人影が、棒高跳びの要領で、空中をひらり一回転。塀の上に優雅に降り立った。

「いやはや、悪い大人も居たものだ。自分の悪事を認めないばかりか、暴力で正当化しようだなんて……全く、虫がいいにも程があるよねえ？」

嘲るようなその口調。建物の影に沈んだ路地裏に現れたシルエツトは、先程のスーツ姿から一転、ユニークな形の帽子と仮面を被った道化師に変貌していた。五線譜の描かれた前掛けが、風にはためいて揺れている。狭い足場の上で、芝居掛かって深々礼などしてみせた。

男たちは突然の出来事に啞然としていたが、すぐに勢いを取り戻す。

「デメエ、何者だッ！」

「まあまあ、そう吠えないでくれよ」

緑と紫を基調とした人は、そんな威嚇には我関せず。にやにやと笑うばかりである。そうして、手元に構えた巨大な笛を、その質量を感じさせないほど軽々振り回して、「そうだねえ、強いて名乗るとすれば——悪党退治が趣味のしがない旅芸人、かな」

舌先に呪文を孕ませて、肺に魔力を溜め込んで、笛口に思いきり息を吹き込んだ。笛から奏でられるのは一音。それだけで、裏路地は沈黙する。筋骨隆々とした男たちは硬直すると同時に泡を吹いて、殺虫剤を掛けられた虫のように地面にひっくり返った。路地を歩いていたムカデや野良猫といったものが、ギョツとして飛び上がると、凄まじい勢いで地面やレンガの隙間に潜りこむ。カラスが飛び立ちそくなって、ゴミ箱の中に落下した。

道化師はパンパンと服を払うと、ぴよんと塀から地面に下りる。

手足を痙攣させている男共を見下していると、どこからともなく飛んできた蝶がその肩に止まった。

「やりすぎだつて？ いやはや、これでも加減はした方なのだけだねえ。モブ相手となると、やはり難しい……ふふっ」

道化師が長く細い指先を差し出すと、蝶はそちらへ飛び移る。白い羽をはたはたとさせていた。

「そりゃあ、『ハンス』の体は当然ボクの物だからね。唾を吐かれて怒らないはずがない

だろう？ この美貌にケチをつけるのは嫌だねえ。見せる機会はないけれど、ボクの音楽のイメージに合うのはこの顔さ」

蝶に話しかけるようにしながら、道化師は爪先立ちで倒れた男たちの間に行く。笛も高めに持ち上げて、いかにも触りたくないといった様子である。通り抜けた後、猫が砂を蹴るようにザッザッと地面で靴底を擦った。

指先に止まった蝶を顔に近付けると、軽くその羽根に唇を添えた。

「ああ、そろそろ戻るよ。図書館の方で、お茶会に参加していたところだね……レディたちを待たせては申し訳ないだろう？」

笛を真上に投げると同時、蝶が飛び立つ。くるり、その場で一回転した道化師は、回った一瞬後にはピンク髪の青年へとすり替わっていた。空中を一転二転しながら落ちてくる笛も、青年の手元に収まる時には黒いシルクハットに変質する。

青年はシルクハットを被り直すと、革靴の足音を鳴らしながら路地裏の外へと歩いていく。

「まったく、相変わらず変なところで大味なのだから」

苦笑いを浮かべると、独り言をぶつぶつと。

「さて、ボクも仕事の続きをしないと。まず路地裏の人たちのこと、おまわりさんに知らせて……」

どこからともなく呼び寄せたトランクを手に、昼間の光に溢れた大通りへと足を踏み出した。

さて、青年が去った後、気絶した男たち以外の生き物が居なくなつた路地裏。その奥の暗がりには、金色の双眼が浮かび上がった。

赤いマフラーを揺らしながら、男たちに歩み寄るその少年に足音はない。正確には、僅かに宙に浮いている。

「……………」

少年は靴先で気絶している男の頬を、つんつんと蹴っていた。目を覚ます様子がないのを見ると、ピンク色が消えていった方角を眺める。

「……あの力があれば、『ピーター・ザ・キッド』を殺せる」

口角が吊り上がる。白銀の下に浮かぶ金色が、貪欲な色を宿していた。

*

「——道化師さん！ 道化師さんっ！」

「おっと、すまない」

机に頬杖をついていた道化師は、少女の声に顔を上げた。

図書館の談話室はこれがなかなか豪奢な内装をしていて、ふかふかの絨毯と落ち着い

た装飾のアンティークの家具で整えられている。丸いテーブルには陶器製のティーセットとお茶菓子が並べられて、そこを道化師を含めた四名が囲っていた。

水色で桃色で金色の髪をした少女——リトル・アリスは、道化師の顔を覗き込んで、大きな瞳をぱちぱちと瞬かせた。

「どうしたの？ すっかり居眠りしているみたいだったけれど……あつ、さては昨日夜ふかししたんでしょー！」

「おや、バレてしまったか。いやはや、夢を見る程度にはぐすり眠りこんでいた」

アリスの目の前に、道化師が人差し指を差し出した。彼が口笛を吹けば、その指先に魔力で出来た蝶がふわり浮かんで、アリスの周りを不規則に飛び回る。「きれい！」と可愛らしい歓声を上がった。

そこに、咳払いが割って入る。

「それでマグス・クラウン。我々は今まで——」

「ああ、紅茶の茶葉をどうするかという話だろう。ボクはダーズリンに一票を入れておこう。キミの推すアッサムも悪くはないが、ここは癖がない物を選ぶべきだ」

「……お前、本当に居眠りしていたのか……？」

「彼の意識は間違いなく、この場にはありませんでした。その点において、先程までの彼の状態は睡眠に値するものだったように思われます」

渋い顔をするアシエンプテルの隣、抑揚のない声でシグルドリーヴァが応えた。

いかにも子どもらしい一人に、軍人氣質が透けて見える一人、感情に乏しい一人に、道化師。てんでバラバラで、共通項も何もない組み合わせだったが、これが日常的に起こり得るのが図書館という空間だった。

道化師は笑う。仮面の下の目を細めて、いかにも楽しそうに語った。

「まあまあ、ボクが寝ていたかどうかなんて、この場においては些細な事だ。ボクにとっては、キミがどうやって彼女たちをもてなすのかがとても気になるよ、アシエンプテル」
「貴様、やはり面白がって覗きにきたのだな……」

「ボクは道化師だ。当然だろう？」

紫の瞳を鋭くして睨みつけてくるアシエンプテル。それでも軽薄な笑みを絶やさないう彼に「ねえねえ」とアリスが語りかけた。

「道化師さんはさつきまでどんな夢を見ていたの？」

「そうだねえ……蝶になる夢だよ。レディ」

第2章 失われた本

図書館は、闇と戦うテイルマスターを育成する場でもあり、また戦う為の手段そのものである。というにもこの図書館の奥には、物語の闇を抑制する為の機構なども存在しており、小規模の闇についてはテイルマスターの手を借りずとも撃退が可能なのだ。テイルマスターと管轄キャストが、全ての闇に対応している訳ではないのである。

部屋の主が『研究室』と呼ぶそこは、他の人間には書斎であるように見えた。

四方を本棚に覆われている、といっても過言ではない空間だ。暗い木目の重厚な家具は、効率を重視して並べられ——具体的には物書き机の裏にベッドが見えている——また本は几帳面に、作者の頭文字順、本のタイトルの頭文字順、本の内容順、あるいは本の年代順に分けて収納されている。細かすぎて凡人には乱雑に並べられているように感じるが、決してそんなことはないらしい。

さて、そんな偏屈な間取りをした部屋の中央。大きな机を前に、皮張りの椅子に座っている黒髪の男こそ、部屋の主ヴィルヘルム・ヴァルトである。赤レンズのモノクルには数多の魔法術式が内蔵されているというが、これもまた、この男以外には把握しきれないかった。

彼は広い机の上、実験レポートと研究資料の中に埋もれたハンドベルを手に取ると——これも常人には散らかっているようにしか見えないが、しかし彼からすれば『完璧なまでに効率的な配置』なのである——軽く振る。

ちりりん、と軽い音。沈黙。

ヴィルヘルムはあからさまに表情を歪めると、舌打ちと共に再びベルを鳴らす。今度は強めに手首のスナップを利かせてやった。一、二……三秒して、返答がある。

「やれやれ。そう急かさなくてもいいと思うのだけれどねえ」

そんな声を伴って、笛が天井から落ちてきた。笛といっても、成人男性ほどの大きさをした、半ば鈍器のような物体だ。これが絨毯の上を軽く跳ねて、倒れそうになったところで、手袋をした腕が掴み支える。

この人が今どこから現れたのか、説明出来る人は居ないだろう。敢えて描写するなら、彼は世界が落ちてくる笛にすっかり目を向けてしまっている間に、文章の外からその道化衣装を滑り込ませてきたのである。

「マグス・クラウン。この装置を使って呼べといったのはお前だろう」

「確かに言ったとも。だがそれは、『ベルを鳴らせば一秒でやってくる』という意味じゃない」

笛を片手に肩を竦めた紫緑の道化師は、咳払いをして大仰に一礼。足を後ろに手を前

に、彼に深々頭を下げた。

「改めましてご機嫌よう、我が愛しの創聖閣下。本日も実に捗っていらつしやいますようで？ 具体的には、試験薬を入れた瓶を犬に拉致された時の表情をしている」

「相変わらず舌が回るな、マグス・クラウン。語彙力に関わるページの削減を検討してください」

「それ、冗談だよね？」

四創聖が一人ヴィルヘルム・ヴァルトは、挨拶はそこで切り上げておくことにしたらしい。手帳を手にとると、それを一枚一枚帳面にめくっていつて、目的のページまで来ると文面を指でとんとんと叩く。彼の人差し指が手帳を叩く度、ふわり、文字列が空気に舞っていく。金色をした、神経質な文字だ。

「マグス・クラウン、今回お前には物語世界に渡ってもらう」

文字列は二人の頭上で絡み合うと、やがて一冊の本へと姿を変えた。

マグスは「おやおや」と声を上げると、顎に手をやり、まじまじ本を見上げる。

「これはまた見事に黒ずんでしまつて……」

彼の言葉の通りである。固く閉ざされた本は、表と裏の表紙の隙間から、ぼたぼたと黒いモヤを流し続けていた。表紙はそのモヤの黒色をすつかり吸い込んでしまつていくらしく、汚らしい灰色をしている。侵蝕が少ないところを探すに探して、ようやくそ

れが若草色の本だったのだと分かった。キャストであるマグスにとっては、見ていて気分の良い物体ではない。

つんつんとつつく指先が煙に汚れると、いかにも嫌そうな顔をしてハンカチで手袋を拭う。ハンカチをどこから出したのか、どうして敢えて触ったのか。それは道化師に聞くべきところではない。

「ここまで侵蝕が進んでいるとなると、間違いない」

「嗚呼、ヴィランが発生しているだろう。お前には闇の概要の調査と、場合によっては対処をして貰う。出来るな？」

「ボクを誰だと思っているんだい、ヴィルヘルム。そもそもキミ、ボクに拒否させる気はないのだろうか？」

射貫くように見やる瞳を、ハハツと軽薄に笑い飛ばす。きつとこれは、彼にとって『初めて』ではないのだろう。なんとも手慣れた様子である。

両の口角を吊り上げると、薄い唇に人差し指を当てる。睫毛に覆われた青い虹彩が、きらり光った。

「このマグス・クラウン、キミに貰った『ハンス』^{ボク}の物語の分、きつちり働かせて頂きますとも」

ヴィルヘルムはその言葉を聞くと、パチンと指を鳴らした。開いた手帳のページが勝

手に破れて、鳩の形に折りあがると、道化師の手元に飛んでいく。

目の前に相手が居る以上、直接渡せばいいようにも思われるが、しかしこの極端な効率主義こそがヴィルヘルム・ヴァルトの個性であった。

「現時点で解明されている該当世界の情報だ。支援したからには、提出レポートには一定のクオリティを期待しているぞ？」

「はいはい、調査担当のハンスにしかと引き継がせて頂きますとも——つて」

早速鳩を分解して中身の確認をしていたマグスは、書かれていた文章を見て、明らかに顔を顰めた。

「お前は子どもが好きなのだろう、マグス・クラウン。丁度良いとは思わないか」

「キミ、そんなことだからマメール司書に『人の気持ちが出らない』なんて言われるんだよ」

真顔で答えたヴィルヘルムに、マグスは深く溜め息などつくのである。

＊

ハンスはマグス^{自分}の記憶を思い返しながら、眼下の景色を見た。

晴れた昼下がりの港町は、町はずれの丘から見下ろすと、家々の白壁と海の水面がきらり光って、目に眩しい。ぶわっと、潮の香りに満ちた風が彼が立つ場所まで吹き上がってきた。頭上でカモメがきゅーいと鳴いて、海の方へと通り過ぎていく。

美しい景色の前で、彼はうーんと大きく伸びをした。——持ち上げたトランクの重みによりけて、帽子がずり落ちそうになって、慌てて鰐を摘まんで正す。

「良い街だ」

ピンク色の瞳が、一人ごちる。

「調査にも身が入るって物だよ。……ああ、もちろん、ボクはここが寂しい土地だったとしても手を抜いたりはいしないよ？　あくまで、そう、言葉の綾って奴だ」

ハンスとマグス・クラウンは同一人物であるが、しかし完全なる同一人物ではない。今も体は、ここ物語世界と図書館に同時に存在している。ハンスがこうして調査をしている間も、マグス・クラウンは図書館でキャストとして別の作業をしているのである。そんな都合があつて、彼らの独り言は常にもう一人に語りかける体だった。

一人で会話をしながら、彼は丘を下っていく。

街の構造は、事前に渡された地図から変わってはいない。よく分からない建物が増えている様子もなかった。軽く周ってみた限り、街の住人にも変質は見られない。黒いスーツが照り付ける太陽の光を吸いこんで少し暑い。ともあれ、一見して異変が見られないのなら、今度は内側を調べてみなければ。今度は市場なんかの人通りが多い場所に目星をつけて、情報を集めるようにしよう。

「マグスに荒事を任せる以上、ボクに出来ることはきちんとかないかね。彼に頼り

すぎるのも、あまりよろしくない。何せ彼^{ボク}には、図書館での仕事もあるのだから」

決意を新たに、いざ一步を踏み出した彼の足元。

「へっ……う？」

足首を何かが締め上げたと思うと同時に、彼の視界が180°回転した。空が下に、地が上に。

ついさつきまで歩いていた道に、ぽてつ、と帽子が落ちる。ゆーらゆーらと、体が大きく揺れている。

数拍置いて、彼はようやく自分の置かれた状況を理解した。つまり、足首を紐で引つかけられて、その紐がそのまま吊り上がったので、すっかり体が宙ぶらりんになってしまったのだ。

第3章 いざ、探索へ！

ハンスは混乱しながらも、どうにか足首に絡みつく紐を外そうとした。けれども、これがなかなかしつかり足に食い込んでしまっている上、彼は筋力に自信があるタイプではない。しばらく体を折り曲げていると腹筋が笑い始めて、ぐでんと吊り下がるばかりになった。

ここで攻撃でも受ければ迷わずマグスに頼るのだが、周囲を見回してもそれらしき人影はない。なだらかで見晴らしの良い丘では、今日もバツタがぴよこぴよこ跳ねている。

宙吊りになりながら、ハンスは顎に手を当てて首を傾げる。

「誰かのイタズラかなあ？」

とはいえ、成人男性を一人捕獲できるような罠である。ハンスも「でも、イタズラにしては度が過ぎてるよなあ」なんてぼやいていたが、生憎と手掛かりの一切がない。

「何にせよ、人が通りかかるのを待つしかないねえ」

これで最後にしようとして、「んーっ！」と気合を入れて上半身を持ち上げたその時である。

「あ」

手掛かりが降って湧いた。正しくは、木の枝に座ってこちらを見下ろしている少年と、ぼつちり目が合った。

赤橙の髪と瞳をした少年だ。背景の木の葉に同化してしまいそうな緑のジャケットとバンダナに、腹と足の肌色が映えている。背後では、マフラーの先っぽが潮風に吹かれて、動物の尻尾のように揺れていた。

二人はしばらく目を合わせて、お互いパチクリ目を瞬かせていたが。

「やあ、ピーター・ザ・キッドくん。今日も元気だね？」

「なんだおっさん、俺の名前知ってるのか？」

軽く手を振りにはにかむハンスを、ピーターは訝しむように見つめる。

図書館に居るキャストならいざ知らず、彼はピーターはピーターでも物語世界のピーターである。当然ながら、ハンスは彼を知っていても、ピーターは彼のことを知らずにいた。

さて、「そんなことより！」とピーターは叫んだ。少年が枝に立ち上がってポーズを取ると、紐でぶら下がっているハンスの体も大きく揺れる。

「へへん、よーやく見つけたぜ！ 子どもたちを攫っているのは、お前だろ！ 『ハーメルンの笛吹き男』！」

びしい、と効果音がつきそうな勢いで、ピーターはハンスを指さしてみせた。ハンスはきよんとした表情で、グローブに包まれた指先を見つめる。フクロウか何かのように、こてんと首を傾げた。

『ハーメルンの笛吹き男』というのは成程、自分はある意味マクス・クラウン自身でもあるから、これは否定できない。彼が自分の正体に気付いたのも、キャストの好だとするば納得がいく。だが、子どもを攫っているというのは、どういうことだろう？

「とぼけても無駄だぜ。子どもたちから聞いたんだ……なんだか怪しい大人が街をうろついている、つてさー！」

「んー、オトナはボク以外にもたくさん居ると思うのだけど」

「ピンク色の髪の毛のヤツが、広場で笛の演奏してたつて」

「あつ、ごめん、それは間違いなくボクだね、うん。ボク以外の何物でもない。マクス^{ボク}が笛を吹きたくなると、ボクまで笛を吹きたくなるんだよ」

「?」とにかく、自分が『ハーメルンの笛吹き男』だつて認めたな!」

ピーターはふふんと得意顔を見ると、ふわり枝から飛び立って、ハンスの背後へと降りる。

「ふっふっふ……この調子で、どうして子どもたちを攫おうとしたのかも、洗いざらい吐いてもらうぜ」

「そこについては否定させてもらおうかな。ボクはそれこそ昨日街に着いたところで、子どもが攫われてるなんて話は今聞いたんだ」

「へっ、そっちがその気ならこっちにだって考えがある。『ごうもん』して口を割らせてやる!」

「ぐ、拷問……っ!?!」

不穏な言葉にハンスは慌てて後ろを振り返ろうとするが、少年に腕を掴まれ体を固定されてしまう。抵抗しようにも、体勢が体勢だ。碌に力が入らない。

「ま、待ってくれ、ボクは本当に」

「これはロストボーイズだって誰一人耐えられなかったキツツイのだ。覚悟しろよ、笛吹き男!」

「というか、正しくはボクは——ひやうっ!?!」

マグスに代わるしかないかと目の色に魔力を纏わせた、次の瞬間。ハンスは素つ頓狂な悲鳴と共に、びくんと体を跳ねさせた。大きく目を見開く。

ピーターがバンダナに着いている羽根を取り外すと、その先っぽでハンスの首後ろをくすぐったのである。ぞわわつと背筋を走る感触に、ハンスは髪を振り乱して命乞い。

「ちよっ、やめ、ひっ! ボクそういうの、よわ、あははっ!」

「やめたら『ごうもん』にならないだろ! ほら、さっさと吐いて楽になっちまえ!」

若干涙目になりながらひーひー言っているハンスを、ピーターは容赦なくすぐり続けた。悪い顔をしてノリノリで『それらしい台詞』を口に出している辺り、少年にとっては恐らくごっこ遊びの延長戦なのであろう。

だから、

「あ、頭にインクが、のぼ——」

「ん？……うわあ!?　だ、大丈夫かーっ!?」

ハンスが木からぶら下がったままくてんと動かなくなってしまうと、大いに慌てた。羽を投げ捨てて「ロストボーイズ、こいつを運——あー、今日一人で良いって言ったの俺じゃん!?　うっわ、俺のバカ!」なんて叫んでいる。飛べるのだから紐を外して下ろせばいいだけのだが、さて、いつになったら気付くだろうか。

ささやかな騒ぎの中、やっぱりバツタは？　気に草原を跳びはねていた。

*

ざざん、ざざん。波の打ち寄せる音がうるさい。

「ん、んん……?」

ハンスが目を覚ますと、視界には石で出来た天井が広がっていた。掛けられたシーツをずらしながら、上体を起こして辺りを見回す。

どうやら、ここは岩を削り抜いて作られた洞窟らしい。絨毯や壁に掛けられた調度品

——悪党から取り上げたと思わしき銃やサーベルなど——の合間から、くすんだ灰色の鉱石が顔を覗かせている。ハンスの荷物は、藁で作られた簡易ベッドの、すぐ隣に積まれていた。

「よつ。目、覚めたか？」

トランクの上に乗せられていた帽子を被ったところで、声がかかる。ピーターは手にした二つのマグカップの、その片方をハンスに差し出した。ココアの甘い香り。

「……は？」

「ん、俺のアジトの一つ」

マグカップの中身をちびちびやりながら、ピーターは壁際に少し体を寄せて、親指で自分の背後をさした。目で指し示された方を追うと、ぼつかり空いた穴の向こうに、快晴の青空と大海原が寝そべっている。

恐らくここは、海に面した崖にあるのだろう。よくカモメたちが営巣をしている、あの穴ぼこの中でも一等大きなものを、こうして使っているのだ。

「子どもたちが居る本拠地に、お前を連れて行く訳にはいかないだろう？」

「それでも、介抱はしてくれるんだね」

「知らないのか？ 俺は子どもたちのヒーロー、ピーター・ザ・キッド！ 大人はそんなに好きじゃないけど、弱い者いじめをしてそれつきりっていうのは、それとはまた別の

話さ」

ハンスは「成る程？」なんて返しながら、ふーっと湯気を吹き飛ばして、一口。ココアの甘さが、舌に優しい。外とは打って変わって、洞窟の中はどこかひんやりとしていたので、ココアの温かさは丁度よく感じた。

「しっかし、参ったなあ。これでまたふり出しに戻っちまった」

「さつきも言っていたね？ なんでも、子どもが攫われているとか」

「そうそう。正しくは未遂なんだけどさ」

そう言つて、ピーターは宙に座りこんだ。座った姿勢でふよふよと床の上を浮いているのである。このアジトに椅子というものがないのはそういうことなのだろうな、とハンスは酷く納得した。立地といい、きつとここはピーターが自分一人の為に拵えたアジトなのだろう。

頬杖をついて、長くため息。

「被害にあつた子どもに話を聞いても、『白色がー』みたいなことしか言わないし。ようやくそれらしい情報が手に入つたと思つたら、偶々そこに居ただけの怪しいおっさんだつたし」

「えーっと、なんだか紛らわしいことしちゃつてごめんね……？」

ハンスは苦笑と共にこめかみを搔いた。「ほんとだよ！」とピーターの声。

「この街のヒーローは俺なんだから、アイツらのことは俺がきちんと守ってやらないといけないのに」

子どもらしい快活とした瞳が、その言葉を発した一瞬だけやたらと大人びたものに変わったのを、ハンスは見逃さなかった。

——『ボクは実のところ、彼があまり好きではないんだよ』

ヴィルヘルムの資料を見て、マグスがあらさまに表情を曇らせたのは、つまりこういうことだった。

『ピーター・ザ・キッドは永遠の子どもであると同時に、子どもたちの守護者としての役割も担っている。彼は庇護されるべき立場のフリをしながら、誰かを庇護する存在なんだよ』

『フリなんて大袈裟だって？ おいおい、ハンス^{ボク}、よく思い出してご覧よ』

『ボクたちが好きな物は、なんだ？』

ハンスはぐいっとマグカップを傾けて、ココアを飲み干した。底に溜まったダマの粉っぽさと、甘さと、舌を軽く焼いた熱さの、その全てを後味にする。石の床はマグカップを置くと、こつんと小気味のいい音を鳴らした。

「ピーター・ザ・キッド」

「なんだ？」

「ボクにその事件を説明する、手助けをさせて欲しい。ほら、ここで出会ったも何かの縁って奴だろうし……何より、キミに出来なくてボクには出来ることも、きつとあるだろうからさ」

この物語世界の主人公である『ピーター・ザ・キッド』が手を焼く事件・異変となれば、裏で闇の軍勢が関わっている可能性は大いにある。そうではなくとも、ここで『ピーター・ザ・キッド』と協力関係を結んでおくことは、今後の調査にとって有意義に働くだろう。

（それに何より、ボクが個人的に彼を助けたいからね！）

緩く笑んだ青年の顔を、少年の赤橙の瞳が、じつと見つめた。

しばしの沈黙の後、出た言葉は。

「えっ、イヤだよ。お前見るからに怪しいし」

「……ちよつと、こんなに爽やかな好青年になんてことを言うんだいキミは！」

「それを口に出すのがダメなんじゃねーの？」

とはいえ、これも仕方のない反応である。何せピーターにとつて、ハンスは『ついさつき会ったばかりの妙な男』でしかないのだ。ハンスが幾ら善意から協力を申し出たところ

ろで、「はいそうですか」とはいかないだろう。

ハンスだつてしょんぼりとしながらも、この辺りのことは認識していた。「ココア、ありがとう」と一言、トランクを手に立ち上がり、ピーターの隣を通つて洞窟の出口の際まで行く。

遠く眼下、崖に打ち寄せる波が白く泡立っている。

「少し待つてろよ。ココア飲んだら、送つていつてやるから」

「いや、一人で大丈夫。氣遣い、感謝するよ」

次の瞬間、ハンスは洞窟の外に一步、足を踏み出した。当然、青年の体は重力に引かれるままに、大海原へと消えていく。

「おまつ——!?!」

ピーターは机にマグカップを置くと、慌てて外へと向かう。『エアーク』の呪文を口を含み、外に出そうとした時——何かが視界の下から上を、まっすぐ横切つていった。

ピンク色の髪が、揺れる。

「それじゃあ、ボクは勝手にキミに協力させてもらうね。また会おう、ピーター・ザ・キツド！」

洞窟の出口から身を乗り出したピーターは、トランクに乗つて空を飛んでいくハンス

の姿を、呆氣に取られて見送った。そのシルエットがカモメたちと並んだところで、ようやくハツと我に返る。

追い掛けようと仕度をしに洞窟の中に戻ったピーターは、ハンスが寝ていたベッドの上にクツキーの缶と『ありがとう』と書かれたメモを見つけたのである。

第4章 視点が飛んで

そこは強いて形容するならば、壁のない書斎のようだった。堂々横たわる長机を中心として、本棚や燭台といった家具、毛並みのいい絨毯などが並び——そうした景色が、限りなく外に続いていつている。天井には等間隔に照明がぶら下がっていた。

長机の短い辺に座って、二人は互いに向かい合う。

「そんな訳で、今から改めて情報収集に向かおうと思うんだ」

ハンスは砂糖とミルクを紅茶にたっぷり溶かし込むと、ずずずと啜った。

……どうやら熱かったらしく、慌ててカップから口を離すと、ふうふうと息を吹きかける。羽根飾りのついた帽子は、お茶菓子の乗った小皿の隣に置かれていた。

「ピーターとの会話でいろいろとキーワードをもらったからね。これを元に調査を進めれば、また新しい手がかりが得られるはずさ」

「そう上手く事が運ぶかねえ」

対面、同じく帽子を傍らに置いたマグスは、コーヒーのドス黒い水面に唇を添えた。薄い唇が湯気ごと黒色を啜って、やがてふうと息を吐く。砂糖やミルクの入れ物でワチャワチャとしたハンスの手元に対して、こちらにはソーサーとマグカップだけが置か

れていた。

「ピーター・ザ・キッドはキミの知つての通り、子どもたちを守るといふ特性を強く持つキャストだ。その彼が手を焼いている以上、やはり一筋縄ではいかないだろう」

「少なくともキミと同じ程度には理解しているとも。だけど、ピーターにも言った通りだ。彼に出来なくとも、ボクになら出来ることもある」

ハンスは小皿のクツキーをぽりぽりとしておいてから、齒に挟まった細かいクズをミルクティーで流し込む。「んんっ」と感動に息を漏らして、酷く幸せそうな顔。

「上手くいっただけいいなあ、くらいに期待しつつ、最善を尽くすだけだとも」

「ボクはつくづく、『ハンス』と『マグス・クラウン』が同じ人間であることを不思議に思うよ」

「そうかなあ。ボクは一人で二人つていうの、なんだかお得でいいと思うのだけれど」

「人を安売りしているリンゴみたいに言うの、やめないかい」

ぱっぱと手袋についたお菓子の粉を払うと、ハンスは使っていた食器を家事用の魔法陣の上に重ねて置いた。

帽子を被り直して、席から立ち上がる。片手を下へおろしてやると、そこにトランクがふつと現れた。

「あつ、クツキー缶はそのまま机に置いておいて。情報が出たら、また楽屋にメモを残し

にくるから」

「おいおい、こつちに戻ってくる度にクッキーを消費するつもりかい」

「クッキー一枚で一個おつかいをこなしてくれるって、ブラウニー程度にコストパフォーマンスがいいよね！」

じとりと見やる青い瞳にウインクを返しておくと、ハンスはそのまま遠く向こうの方へと歩いていく。姿を隠すようにひらりと白い蝶が舞いあがると、それきり部屋の中は静かになった。

一人残されたマグスは長い睫毛をゆっくり瞬かせると、コーヒーをすっかり飲み干した。ブラツクの、眼が冴えるような苦味と後味が、口いっぱいに広がった。

「キミが甘い物を食べたり飲んだりすると、ボクの舌もいくらか甘くなるのだけど……」
呟き溜め息などつくと、彼は道化の帽子ですっかりと顔を覆った。ハンスの歩いて行った方角とは、真逆へと歩いていく。椅子は後ろ足で机にしまっておいた。

「ああ、本当に——」

＊

「——大丈夫かなあ、彼^{ボク}」

「安心して下さい！ このシュネーヴィッツェンが出るからには、皆さんには輝かしい勝利を約束しましょう！」

「おや、聞かれてしまったか……そりやあどうも、ありがたい」

ブイツと二本の指を立て、快活に笑う少女。ここで訂正を入れるのは野暮というものだろう。マグスはただ、道化師らしく大袈裟に礼をした。

今、彼ら彼女らは、巨大な城を背に森の茂る戦場を見据えていた。マグスの隣では、話しかけてきた姫騎士シユネーヴィッツエンの他に、二人のキャストが出陣の準備を整えている。ランプが遠く空に跳ねるのを見て、「悪くない見世物じゃ」なんて賛辞を述べる声。

ハンスには既に試合に出る旨は伝えてある、しばらく『楽屋』への扉は閉めておくことにした。

同一人物である。異なる世界にあっても、常に視界や感覚を同化させておくことは可能ではあるのだが、それをやると脳の処理が追いつかない。よつぽど片方が働きかけない限りは、ああしてワンクッションを置いてやり取りをしているのだ。

「ところでプリンセス、一つお伺いしても？」

「はい、なんででしょう！」

「どうしてファイターが同じチームに四人も居るんだい？」

「かぐやさんとマリクさんと呼ぼうとしたら、他の試合があるからって断られてしまった。急遽もう片方の方を呼んできました！」

マグスは『もう少し融通を利かせても良かったのではないかなあ』と思いこそすれど、やはり口に出すのはやめておいたのだった。

*

その日少年は塀に向かってボールを蹴って、一人遊びしていました。

「みんな、遅いでやんの」

血色の良いほつぺたをむすーつと膨らませて、ぽてんぽてん、跳ね返ってくるボールを蹴りつけます。

彼はなんてことはない、どこにでもいる少年です。半袖半ズボンから健康的な、けれどもまだほっそりとした手足を出して、短く揃えた髪の下には好奇心にきらきらと輝く瞳を隠し持っていました。

住宅地の端、家々の間が広いこの区画は、子どもたちの格好の遊び場です。昼間大人たちが海や市場に出かけている時間はほとんど人通りがなくて、どれだけ走り回ってボールを蹴っても、昼寝をしていた野良猫や捨てられた木箱に被害が出るだけでした。それに、港町特有のぐねぐね曲がった細い路地は、追いかけてこやかくれんぼにピッタリなのです。

ぽてん、ころころ。

「あ」

少年は小さく声を漏らしました。うっかり変なところを蹴ってしまったので、ボールが路地に入り込んでしまったのです。

とてと路地の入口に駆け寄ると、少年は中を覗き込んでみました。レンガの塀に囲まれた細い道はやたらと薄暗く、奥に行くほど暗くなっていくようです。ボールは奥の曲がり角の向こうに、ころころと吸い込まれていつてしまいました。

一旦、少年は路地から体を離して、右に左に辺りをきよろきよろ。けれども、じりじりと太陽に焼ける石畳には、ちよつとの影もありませんでした。ただ、カモメがきゅーいきゅーいと鳴いているばかり。

うーん、と少年は考え込みます。そういえば、最近お隣の隣のさらに隣のクリスが、ゴロツキたちに連れ去られそうになったと聞きました。そうじゃなくても、この辺りの子どもたちは、ロストボーイズたちに『白いお化けに気を付けろ』なんて言い聞かせられています。自分一人で暗い路地裏に入るのは、ほんの少しだけ怖かったです。

「……ううん、怖がつてちやダメだ！」

ぱんつと自分の頬を気付けに叩くと、ぎゅつと拳を握りしめます。

「これくらいで怖がつてるようじゃ、いつまでたつてもピーターから羽根飾りをもらえないよ。それに、それこそ怖いモノが出たら、ピーターがすぐにかけてくれるさ！」

一人頷くと、少年は意を決して路地に入っていきます。

日陰に入った所為か、それとも得体のしれない何かの為でしょうか？ どことなくひんやりした空気が漂っているようで、少年はぶるると体を震わせます。それでも、ロストボーイズたちと同じように、ピーターとそっくりな羽根飾りをつけた自分の姿を頭に浮かべて、奥へ奥へと歩いていきます。

途中、空き瓶を蹴飛ばしてしまつて、その音にビツクリ仰天しながらも進んで。とうとうボールの消えたあの曲がり角に一步、足を踏みこみました。

「やあ、ここにちは」

路地の先に居たのは、ゴロツキでも白いお化けでもありませんでした。

ピンクの髪にちよこんと帽子を乗せた青年は、につこり笑うと彼に声をかけます。

「これはキミのボールかな？ あんまり良いシユートだったから、こんな方まで飛んできてしまったみたいだね」

青年はぼかんとしている少年の頭をぼんぼん撫でると、「はい」とボールを渡してくれます。

「キミ、友だちと遊んでいるところだったりするかい？ 実はお兄さん、ちよつと聞きたい事があつて」

ピンク色の髪の毛をして、黒いスーツを着た、片眼鏡の青年。その姿は——少年が噂に聞いていた、あの人の人相とそっくりそのまま同じだったのでした。

*

「あつ、お兄さんは怪しい者じゃなくなつてね。ここでお話するのが怖かったら、違う場所でも——」

ハンスの目の前、ボールを胸元に抱えた少年は、くるり踵を返すとどこかへ走り去つていつてしまった。呼び止める暇もないくらい、一目散である。とたたたた、と軽い足音。

一人、路地に置き去りになつたハンスは、自分の顎を擦つて「うーん」と唸つた。

「これで三戦三敗かあ」

街での情報収集は、途中まではまつたくの順調だった。酒場の前で道に水を撒いている男性や、宿の受付の女性、あるいは果物の安売りをしている店員。大人たちから話を聞く分には、特別不自由することはなかった。それどころか果物売りのおばさんから、パイナップルを丸々一個オマケされた。

ところが、子どもにもターゲットを変えた途端、これが敗戦に敗戦を重ねている。話術の末の敗北ならまだ納得も行くのだが、

「今みたいにお話をする前に、どこかに行っちゃうんだよねえ……マグス^{ボク}ならともかく、ボクは子ども受けもそこそこだと思つていたんだけどなあ」

ここは第一印象でガツと心を掴むしかないと、掌でぼんやりと魔法の練習。魔力で

作った白い蝶を、そのまま飴玉にすり替えてみていた、その時である。

「なあなあ、今のどうやったんだ!？」

視界の上側に、緑色をしたマフラーの先がひよこつと迷いこんできた。ちらり視線を上げれば、逆さまにぶらさがった少年の顔と目が合う。好奇心にきらきらと瞳が輝いていた。

ハンスは目をパチクリとさせると、そつと、飴玉を乗った手をピーターに差し出してやる。飴玉はあつという間に包装を剥がされて、少年の口に消えていった。

「ちよつとした手品だよ。蝶に目を取られている間に、こそつと服の裾から飴を出したんだ」

「ほへえ、まひようとかひやにやいんひやな」

「なんだったら、キミにだつて出来るとも。ほら、掌に蝶の代わりに小さな竜巻を使つて、揺れるマフラーのところに何か隠しておくのさ」

「んー！ それ、超いいアイデアじゃん！ もーらいつー！」

もごもごしていた飴をガリボリ齧って食べてしまうと、ピーターはぐつと親指を立ててハンスの前に突き出した。

けれども、すぐにハツとした顔になって、今度は何やら咳払いをしてみせる。

「それよりも！ やっぱり苦戦してるみたいだな？ 事件の調査」

「おや、見ていたのかい？」

「子どもにあげようとしたリングを、犬に搔つ攫われた辺りから見てたさ」

逆さまで居ることに飽きたのか、ピーターは近くの塀の上に下りた。そのまま座りこむと、頬杖をついてにやにや笑つてハンスを見る。『それ見たことか！』といった顔だ。「言つただろう？ アンタの手は借りないつてさ。これならやつぱり、その必要はないみたいだ！」

「ははっ、この調子だとわりと否定できないんだよなあ……うーん、ボクもまだまだだ」乾いた笑いと共に、ハンスがこめかみのところをポリポリと搔いた、その時だ。

「居たーっ!!」

突然響いた大声に、ピーターとハンスはほとんど同時に振り返る。

見れば、どうしたことだろう。大勢の足音を伴つて、路地の向こうから十人ほどの子どもがやつてくるところだった。その中には、ついさつきと十数分前と数十分前に逃げたいつてしまった、あの子どもたちの姿もある。

ピーターは軽く手をあげると、「よお、お前ら」なんて子どもたちに挨拶をする。

「なんだ、俺のこと探してたのか？ 呼んでくれれば、俺はどこにだって飛んでいくのに」

「あつ、ピーターも居るー！」

「……………」

きよんとするピーターを他所に、小さな、それこそ七歳くらいの子どもが前に出て来る。狭い路地は今やすっかり子どもの群れで埋まっていた。

男の子はハンスの方を見ると、いかにも表情をパアと輝かせる。ハンスもこの子には覚えがあつたので、「やあ」なんて気さくに手を振ってみた。ピーターは何事かと、子どもとハンスの顔を交互に見比べている。

「ピーター、あのね。この人、ぼくのことをたすけてくれたんだよ！」

「助けたなんてそんな。ボクは悪い大人に『そんなことしちゃいけないよ』って注意をしただけさ」

この男の子はハンスが柄の悪い男たちに囲まれる切っ掛けとなつた、まさにその人であつたのだ。

小さな男の子に続いて、他の子どもたちもピーターやハンスの足元に駆け寄つてきて、みんなでいっぺんに話し始める。ピーターは手でどうとやっついて、ハンスはいろんな子の頭をよしよしと撫でてやっていた。

「ぼく、おいかけてこしてたら、ぜんぜん、前見えなくなっちゃって、わるいやつにぶつかっちゃったんだ」

「オレこわくてなにもできなかった……ごめんなさい、ピーター」

「オレはロストボーイズとかピーターを呼びに行つてたぜ！」

「でもそれ、このピンクの人が悪いヤツに連れていかれた後じゃん」

「この人、周りの誰よりも先に悪いヤツに話しかけたんです！『その子も謝っているじゃないか』って」

「ピーターより弱っちそうなのにな」

「広場で笛吹いてた時、ヘンなヤツなんて言つてごめんなー」

「でもやつぱりこの兄ちゃんのカツコウ変だよな。学者サン？」

「学者さんだったら、多分もつと賢そうでもつといやみつたらしいと思うよ」

「わちゃわちゃとしていた子どもたちは、ピーターの「おーちーっーけーっー！」という言葉で、ぴたつと黙りこんだ。

ハンスは一人感心する。子どもたちは大声に驚いたからではなしに、ただ『ピーターがそういうから』黙つたに過ぎなかったのだ。

「いいか、話す時は順番に……俺が何か返事をしてから言うこと！ えーつと、それで……コイツが、チビのことをゴロツキ連中から庇つてやつたつてことだよな？」

ハンスを指さすピーターに、子どもたちはみんな揃つてこくこく頷く。そうして全員で一斉に話し始めようとしては、やれボクが先だとか、やれジャンケンで決めようとかやり始めるので、ピーターは「それじゃあ……そこから右に話していくんだ。俺から見

て右な！」なんて言わなければならなかった。ハンスはハンスで、ここで自分が下手に手品など披露しようものなら、ピーターの指揮のキャパティシイを超えてしまうに違いないと、大人しく見守る。

ピーターに指さされた子どもは、いかにも誇らしげに語った。

「オレたち、にーちゃんがあの後どうなったか分からなかったし、チビがありがとうって言いたいっていうから、みんなで協力してにーちゃんを探すことにしたんだ。ピーターはさいきん……たいへんそうだったから」

「なるほど？」

「それで——」

「次はぼくが話す番ーっ！ でも、やつぱりピーターはすごいや。おチビを助けてくれたヒーローと、とつくの昔に友だちになってただなんて！」

この時、ピーターはハンスになんともいえない表情を向けた。
ハンスはただただ笑顔を浮かべておく。

「え、えーつと、その、コイツとはだな……」

「もしかして、ピーターがよそから呼んだ助っ人だったり？」

「でも大人だよ？」

「それじゃあ、ピーターの部下とか！」

「それだ！」

ピーターは再びハンスの顔を見た。

ハンスは、今度はピースサインと共にウィンクを飛ばしておく。

しばらく「うー」だとか「あー」だとか、唸り声をあげて頭をガシガシ掻いていたピーターだったが。

「コイツは、アレだよ。……最近いろいろな事件が起こって……その、大人のことは大人に始末を付けさせることにしたんだ。ほら、お父さんやお母さんが怪我したら、たいへんなのは子どもだからな。俺がお前たちを守ってる間、大人の番は大人にさせるって寸法さ！」

「トーゼン、最終的に街の平和を守るのは俺だけど！」なんて胸を張って付け足すと、周りの子どもたちからは「おー！」と歓声が上がった。ハンスもその隣でパチパチ拍手をしておく。良い笑顔だった。

「俺は今からコイツと『作戦会議』をしなくちゃいけないから、お前たちは向こうで遊んできな」

「わかった！」

「おにーさん、また遊ぼうねー！」

子どもの群れは連れ合つて狭い路地を去っていく。「ぼくも『さくせんかいぎ』出た

かったな」と言う子に「ピーターがあいつてるんだからダメだよ！」なんて声がかかる辺り、子どもたちのピーターに対する信頼が伺い知れるというものだ。

子どもたちの背中に手を振っていたハンスは、改めてピーターに向き直った。

「さて、そんな訳でピーター。ボクはキミの部下つてことでいいかな？ なんなら日雇い程度でもいいけども」

「……俺は子どもの味方の味方だ。子どものオヤツやおモチャなんかは、悔しいけど大人が作った方が上手くいくことが多いし」

ため息。それから、気を取り直すようにぶんぶん頭を振ると、今度はニカツと笑ってハンスに手を差し出した。この切り替えの速さは、間違いない子どもの特権だろう。

「しかたねえから、おっさんを部下にしておいてやるよ！」

「ふふつ、こいつはどうも。けど、おっさんという呼び方は止めて欲しいなあ」

差し出された手を掴んで握手。結んだ手を軽く振りながら、ハンスは気取って帽子を持ち上げ会釈をした。

「ここは友好の証として、気安くハンスと呼んでくれ給え！ ふふ」

*

「ヒーロー、ねえ。彼^{ボク}ならともかく、道化には過ぎた肩書だよ」

帰城^{ワープ}中の片手間、ハンスの記憶を覗いたマグスは一人ぼやいた。自嘲混じりの言葉

だった。

彼には自覚があった。つまり、自分は『吉備津彦』や『サンドリヨン』のような、誰かに憧れる為のキャスト^{偶像}ではないのだと。

「さて、こうなると気になるのは他のキャストの動向……特に、目下警戒すべきは」

……2、3、4。ワープ完了。

とんつ、と靴底が噴水の魔法陣を叩いた。癒しの魔力がページの綻びを治していくのを、笛を手元で遊ばせながら確認する。ぴろぴろと魔笛の音が、城前の静寂に響いた。

『ナイトメア・キッド』『ピーター・ザ・キッド』のアナザーキャストにして、影の少年。夢をもつて誰かを守るではなしに、悪夢をもつて敵を排除する在り方」

あとで楽屋の方にメモを残しておこうか、いや事が起こった時にはボクが出る訳だし構いはしないか。

そんなことを思考しながら、宙に浮かせた指先を右から左にすうつと動かし、戦場のマップを開く。

「とはいえ、まずはこちらをどうにかしないとねえ」

移動の矢印を引くと、目的地に向かって歩いて行った。

第5章 本当にあったナイトメア

「いっただつきまーす！ ……んめえ！」

サンドイツチを口いっぱい頬張つて、ピーターはピアと顔を輝かせた。妖精の粉が一層光を増して、塀に腰掛けていた体がふわふわ浮かんでいく。ハンスが慌ててマフラを掴まなければ、きつと潮風に乘つて飛ばされてしまつていただろう。

大通りから一本外れた裏道は、太陽の陽射しに照らされているにも関わらず、どこもなくアングラウンド的な雰囲気の漂う場所だった。夜を待つバーのぴつたりと閉じた扉や、歩道から一つ下がった場所に隠された扉、魔術的な物だらう干したタマネギをかけた扉なんかが連なっている。空き瓶が音を立てて、レンガの道を転がっていった。

そんな場所にある薄汚れた塀の上に、二人は並んで座っている。

「それで、^{ここ}で見張りをするということだけだ」

ピーターを風船のように持ったまま、ハンスは膝に乗せた紙袋を漁る。チヨコレートでかてかにコーティングされたドーナツを手にとると、パクリ。ご機嫌を口元に浮かべながら続けた。

「ということとは、犯人の目星はついているのかい？」

「そりやお前、子どもを攫うようなヤツつてなれば、それは悪い大人に決まってる。それに、俺が証拠を掴めてないってことは、きつとよっぽどうまくやつてるんだ。単独犯とは思えない」

口元にサンドイッチのソースを付けたまま、得意顔で人差し指を立てた。

「貿易商の部下だった、あのゴロツキ連中の仕業に違いないさー!」

「貿易商……かつて妖精の懐中時計とティンカーベルを使って、永遠の命を手に入れようとした人だね」

「そうそう。リーダーが居なくなった後、行き場のなくなったヤツらが、街に残って悪さをするようになったんだよ。たぶん今回のも、その一環だ。やつあたりってヤツ?」

ハンスは物語世界に入るに際して、『ピーター・ザ・キッド』にまつわる物語を予習していた。

東西南北あらゆる物品が集まり栄える『交易都市』。海賊王アイアン・フックの拠点にして、謎のヒーローことピーター・ザ・キッドのお膝元であるこの街は、少なくとも二度クロノダイルの襲撃を受けている。その切っ掛けとなったのが、今話している事件だ。

ある欲深い貿易商が『満月の夜に妖精がネジを巻くことで、持ち主に永遠の命を与える』という懐中時計の伝説を聞き、我欲の為にティンカーベルを誘拐した。ところが時

同じくして、妖精を捕食せんとクロノダイルが街に迫ってきており——貿易商は逃げている途中で、時計ごとクロノダイルに丸呑みにされてしまったのだ。クロノダイル自体は、その後ピーターとフックの共闘によつてどうにか退けられたのだが、その影響は他の形でも表れていたらしい。

「しかし、そんなことまで知ってるなんて。もしかしてお前も、永遠の命とかに興味があるのか？」

「ボクは永遠の命よりも、妖精が作るお菓子のほうが気になるなあ。ほら、あの花粉を丸めて作った黄色いお団子！ ハチさんもちよくちよく持つているけど、すごく美味しそうだよ」

「あー、アレかあ……実は、パサパサしててそんなに甘くない」

「ええ……!？」

ハンスがいかに悲痛な声を上げたその時。突然、ピーターが塀のところまで降りてきて、彼の目の前で「しーっ」と唇に人差し指を立てた。そこでハンスも遠くから近付いてくる足音に気付いたようだ。

伸びをして遠くを見る。見覚えのある三人の男が横に並んで、こちらへ歩いてきた。た。

ピーターはひそひそとハンスに話しかける。

「なあ。本当に、隠れなくて大丈夫なのか？」

「これはそういう魔法さ。なにせボクは『グリム童話のハンス』どこにもいる誰かさんでもあるからね。そういう風に振る舞えば、野良猫程度にしか認識されないと」

くすくす笑いながら、ハンスはピーターの口をハンカチで拭いてやる。言葉の通り、男たちはそんな二人を見事に素通りしていった。

それどころか人目がないと思ったのだろう、こんなことを話し始めた。

「まったく、とんだ邪魔が入ったもんだ……あのピエロ野郎、次会ったらタダじゃおかねえ」

「まあ落ち着けよ。あの『ブツ』さえ届えちまえば、この街はオレたちの天下だ。仕返しはその時でも遅くはねえ」

「それもそうだな。にしても、他の船に紛れ込ませる為とはいえ、どうしてオレらみてえのが日中まで働かねえといけないんだか」

「我らがリーダー様は、最近だいぶ調子ずいてきたからな。コレが終わったら他の連中焚きつけて潰すか」

「おつ、いいねいいねえ」

二人は瞬きした後、顔を見合わせる。どうやら、何か良からぬことを企てているのは間違いないようだ。

今にも飛び出しそうにうずうずしているマフラーを、ハンスはくいつと軽く引いてやった。

「今は堪えるんだ、ピーター。ここで下つ端を数人捕まえたところで、手掛かりがなくなるだけだ」

「それは……分かつてるけど……っ!」

『エアールウォーク』を使つて脇目もふらず飛んでいく——なんてことをしなかった辺り、この少年はきつといくらか賢いのだろう。ただ純粹に、強い正義心が自分のその理性を許してくれていないのだ。ぎゅつと拳を握り締める。三人組が歩き去つていく後姿を、どうにか睨み続けるだけに堪えていた。

「それにしても」とハンスは首を傾げた。

「他の船に紛れる、というのはたしかに妙案だけど。それはこの交易都市に限つては、愚策の極みだ。なにせ、この一帯の海はアイアン・フックの支配下にある。下手に動けば、それこそ陸で動く以上に早く、勘付かれるはず……彼らはどうしてその上で、海路を？」

「フックのおっさんは」

ハツとして、ハンスは顔を上げる。ひとえに、そう呟いたピーターの言葉が僅かに震えていたからだつた。

ピーターはその瞳を伏せながら「おっさんは」と繰り返して。けれど最後には唇を噛

んで、言葉の全てを飲み下してしまった。自分のマフラーを掴んで、思いきり引つ張る。ハンスの手から逃げる。

「俺、先回りして港に行くよ。今ならまだ、アイツらの悪だくみ、阻止できるかも！」

「ピーター、ボクもいつしよに」

「『空の彼方へ』！」

詠唱。ハンスの指先が少年を制止するよりも早く、その体が風に溶ける。緑色が残像を後ろに引きながら、透き通るような青空に飛び込んでいく。少年の体が、見る見る小さくなって、鳥の影と並んで、紛れて、見失ってしまう。

今のピーターは一人にするべきではないと、そういう直感があった。アイアン・フツクとの間に何があつたのかはまだ分からないが、少なくともただ喧嘩したとか、そういう単純な話ではないようだ。

ハンスは口笛を唄う。魔力の込められた旋律に、トランクはカタカタ動いた後、ゆっくり空中に浮かびあがった。

「とにかく、今は彼を追いかけて——」

トランクに跨ろうとした、その時だった。背後、ぬちやりと、粘着質な液体が跳ねる音がしたのは。

振り返った先にあるのは、数分前と何ら変わらない景色。怪しげな店を両脇に沿えた

レンガの道、雲一つない空、地面に横たわる自分の影。青年一人しか居ない道を潮風が通り抜けていく。

だが、何も変化がないからこそ、違和感が拭えない。今の鼓膜に入り込んでくるような音は、なんだ？

警戒に一步、左足を下げようとして、

「っ!？」

自分の足が動かせないことに気付いた。いや、足だけではない。指先から爪先に至るまで、まるで石像にでもされてしまったみたいに、すっかり動かなくなっている。

敵影は目に見える範囲には認められない。まずは冷静に状況を分析する。

（まばたきや口の開閉は出来る……体が動かせないというよりは……『輪郭が固定されている』?）

桃色の瞳を忙しく動かした。カモメが鳴く声がある。

（そもそもボクは、どういう干渉を受けた結果、身動きが取れなくなっているんだ? どこかで髪の毛でも拾われて、それを呪術に? いや、それにしては……）

そこで思考が止まる。一瞬、体が僅かに動き、けれどもすぐにまた動かさなくなったのだ。

（今、鳥が頭の上を通り過ぎて……変化があったのは……そうか、影!）

直感、確信。ハンスは足元から伸びる自分の影を見た。

普段と変わらず地面に伸びる、青年のシルエット。その中に、黄金をした双眼が浮かんでいた。

青年と視線があつたことに気付いた瞳が、にんまりと目元を歪めると同時。ぶわり、影の中から蝙蝠が群をなして飛び出してきた。

「ぐっ……!？」

身動きの取れない体が、影の形に縫い付けられた体が、食い千切られる。正しくは、蝙蝠が体にぶつかり闇に弾ける度、蝙蝠だった黒がしみこんだ場所から魔力が吸われていく感覚がある。スーツのシャツや桃色に、黒いモヤがかつた何かが付着して、汚していく。

ハンスは咄嗟に対抗、口笛を詠唱代わりに歌つて、真白に輝く蝶を無数に羽搏かせた。蝙蝠が蝶に体当たりされ消え、逆に蝶が蝙蝠に噛み付かれ消え。それを繰り返し、蝙蝠の幾つかを迎撃しながら、余つた蝶をスーツに纏わせる。

叫ぶ。ハンスの全身が蝶の群れに呑み込まれる。

「すまない、頼むよ！ マグスッ！」

次の瞬間、蝶の群れの中から魔笛の先端が伸びて、残つた蝙蝠を殴り倒した。びちゃりびちゃり、液体に溶けた蝙蝠がレンガの道に落ちる。無数の蝶の影を背負いながら飛

び出した道化師は、そのまま自身の影に向けて魔力弾ドローションを放った。

音符を纏った弾は、地面に浮かぶ黄金目掛け一直線に飛んだが、

「チィッ！」

舌打ちと共に、銃声が一回。地面にぶつかる前に魔力は解れ、空中で飛散した。ずり、赤い残像を伴いながら、影の中から一人が跳び出す。

銀色の髪をしたその少年は、僅かに地面から浮かびながら、忌々し気に道化師を睨んだ。手元、口から煙を吐く銃をくるりと回し、再び道化師に向かって構える。赤いマフラーがはたり、はためいた。

「あのまま大人しく食われてりやいいものを……」

「生憎と、あの体はボクも気に入っていてねえ。初めて会う誰かにプレゼントできるものじゃあないんだ。分かってくれるかい、ナイトメア・キッド？」

「ハッ、俺の名前まで調査済みたあ恐れ入る。街の中を嗅ぎまわってたのは、伊達じやないってか？」

嘲笑うような表情をありありと浮かべ、引き金を引く。銃声はやはり一回。マグスは咄嗟に右に避け、追撃の二声目も地面を踏んでステップでかわす。ひらりひらり、道化衣装の飾りの裾が揺れる。前垂れがふわりと膨らむ。巨大な笛を外に振ることでバランスを取り、踊るように跳びはねた。

大きくは跳べない、空中では身動きが取れず良いのだ。間違ってもあの銃弾には『掠りもしてはいけない』。

ナイトメアはマグスを空高くから見下ろした。

「どうした、そのでかい笛は飾りか？　銃弾の一発くらい受け流してみせろよ、ピエロ」
「悪いが、キミの逸話についても把握していてね」

ちらり、銃で撃ち抜かれた地面を見た。レンガは一つの銃痕、ドス黒く焼けた穴を中心として、粉々に砕け散っている。

一見すれば、一発重い銃弾をもらっただけに思われるが。

「参ったよ。まさか本当に、三発撃つても一発分の銃声しかないとは」

ビリー・ザ・キッド。早撃ちの名手たる彼には多くの逸話があり、その中の一つ、酒場での早撃ち勝負に曰く。『一回の銃声の後、相手の男は脳天から血を流し倒れた。男の額にはコイン程の穴しか開いていなかったが、彼はこの一回の銃声の中で三度引き金を引き、三発の銃弾を全て男の額に命中させていたのである。』

ピーター・ザ・キッド及びナイトメア・キッドはこの性質を大いに受け継いでいる。つまり、

「一発掠ろう物なら、実質そのまま三発当たる。キミの魔力を籠った銃弾を三発も受けるなんて、考えたくもないねえ」

「へえ。大抵のヤツは『一発どうにかすれば、隙が出来る』つつつて狙ってくるんだが。……ああ、まったく、うっかり得物を弾き飛ばされたり、うっかり致命傷を負ったりしねえ相手は久々だ」

カラカラと笑う。口角が吊り上がる。ぎらり、黄金色が獰猛に光った。

「――全力で潰したくなかった」

前屈になった少年の体に、魔力の反応を見る。妨害は間に合わないと判断、咄嗟に背後に笛を振るう。

『貴様ら、ノロ過ぎなんだよ』オ！

詠唱と共に、赤いマフラーが虚空を裂く。背後に回していた魔笛に、思いきりナイフが当たる音。得物が交差し擦れ合いぎちぎち鳴る中、ナイトメアはナイフを持つ腕の力を緩め、左手に持った銃を道化の脳天目掛け発砲。これをマグスは背中を後ろに反らし避けながらバク転。着地際を狙って首元に振るわれる刃も、どうにか笛のパイプに食い込ませ押し留めた。

『切り裂け』！

ドロッシュット

今度はマグスの詠唱、魔力弾の軌跡を自分を囲うように描き自衛の構え。横殴りに襲いくる弾を避けようと宙に逃げた青年に、そのまま一直線に魔力を放つ。もう一度回避を踏ませると、この隙に塀の上まで跳んだ。

これで一回までなら、塀の後ろに逃げこんでかわせるだろう。見越して塀諸共撃ち抜いてくるやもしれないが、直に当たるよりかはマシだ。

仮面の下、青い虹彩を左右に走らせる。

ここには塀以外の遮蔽物はない。営業時間外の店や怪しい店ばかりで、看板すらろくに表に出ていない。裏路地に逃げたところで、頭上から狙撃されればカモもいいところ。ついでに言えば彼は近接戦は得意ではなく、銃弾とともに撃ち合える程連射力のあるスキルや魔力弾（ショット）は持ち合わせていない。この不利は覆せない。

こうなれば、取れる択は一つだ。

塀の上で巨大な笛を片手に一礼、太陽を背にする少年に挑戦的な笑みを浮かべる。芝居じみて声を張り上げる。

「生憎ここは場所が悪いようだ……ボクはここで暇させてもらおうよ」

「俺が獲物を逃がすと思ってるのか？ おめでたいヤツだ」

「ははっ、道化師が辛気臭くちゃあ、面白くないだろう？ そりゃあキミ、自明の理って奴だとも」

目を細め、口角をリラックスさせ、笑う。口調は喜劇を語るように、なんなら時折笛をびろびろ鳴らす。足踏み。

相手に余裕を見せつける。何か逃げる為の策があるのだと思わせて、相手にその策が

何か推測させる。後はそれを裏切れればいい。裏切れなかった時は、奥の手を見せた上で逃げるしかないが、逃げに切った時点で再戦時の勝率は下がると言わざるを得ない。

青と黄、睨み合つて——今、動いた。

銃を持つ手が伸びる。少年は狙い定め、一回発砲音。照準は下向き、後ろに跳んだところを確実に撃ち抜く算段。

対して道化師は、

「っ！」

「……！」

動かない。

一発、二発、三発。銃弾が服を切り裂き、太腿を貫通する。撃ち抜かれながら、口に魔力を孕ませる。インクの青がびちゃりと堀の上を汚す。笛に唇を添える。銃口が急に合わされる。銃声の二回目が鳴るより早く、道化師は高々演奏を響かせた。

『聞き惚れて、我を忘れる』！

魔力を帯びた音が、快晴の下に響く。常人ならば一瞬で気絶する音波に、ナイトメアは奥歯を噛み締め、照準も一瞬ブレた。だが、それは主要人物^{キヤスト}を行動不能にさせるには、余りに足りない。鼓膜をごと頭を揺さぶる音に表情は顰めているものも、ひたり、再び脳天に狙いを定める。

あとは、指を動かすだけで、終わる。痛みに呻く道化師は、笛を吹いた直後で無防備だ。

きゅーい、カモメの鳴く音がした。

「ぐっ!」

翼が再び太陽を遮った。

ナイトメアは突然顔面に突つこんできた海鳥に、くぐもった呻き声を上げる。舌打ちして追い払い、そのまま銃を向けようとするのだが、

「な、このー! 離れろー! 小賢しいッ!」

彼に群がる鳥の数は一羽二羽と増えていき、あつという間に少年の体は甲高く鳴くカモメたちに包囲されてしまった。拳と銃で殴り倒し、魔力で出来た竜巻を起こせばばたばたと落ちていくが、それにより舞う羽が視界を遮る。髪やジャケットをクチバシで引つ張られ、鬱陶しいことこの上ない。

周囲が見えないなりに道化師が居た場所を撃ち抜いてみるのだが、塀の石材が焼ける音がするばかりだ。逃げられた、という確信に舌打ちをした。

数分もすれば、道は脳震盪に気絶したり、風に叩き落とされたりした鳥の群れに埋め尽くされた。死屍累々——正しくは死んでいないが——の惨状を尻目に、ナイトメアは黄金をぎらつかせる。

「覚えていろよ、ハーメルン。次は絶対に逃がさねエ……！」

*

路地裏、あけつひろげになったトランクと、地面に並ぶ薬瓶や救急箱の隣。

そこに座りこんだハンスは、傷のない太腿に薬をたつぷりと塗って、包帯をぐるぐると巻き付けた。ふう、と一息つく。

「これでどうだい、マグス？」

鍰を摘まんで帽子を軽く持ち上げれば、服装はそのままだに、瞳と髪色が瞬時に代わる。青い虹彩に紫の髪 of 青年は、痛みにくぐもった声を上げた。包帯のところにはインクの青が滲んでおり、白いこめかみをつつと汗が流れていった。

「応急手当ということを考慮して、ここは多めにしておこう。しかし、多少喧嘩を売られることは覚悟していたが……まさか、ああも敵意を露わにしてくるとは」

帽子を元に被り直すと、再び髪と目が入れ替わる。傷口が消えて、包帯も真っ白に戻った。

桃色の青年は扉に背を預けたまま、うーんと顎を擦る。

「あれは敵意と呼んでいいのかなあ。だってあの子、恐らく目的はボクたちの魔力だろう？」

「恐らくは。まあ何にせよ、今のままじゃあ戦うしかないことは確かだ。だってボクは、

自分の魔力を手放す気はこれっぽっちもないからねえ」

「そもそも、彼がどうしてボクたちの魔力を欲しがっているのかも不思議だよね。『ナイトメア・キッド』は確かに好戦的なキャストだけど……他人の、ましてや大人の力を欲しがるなんて妙な話だ」

目の色を変え、帽子を上げ下げしながら、一人は二人で会話をする。

「アイアン・フックの件といい、ボクたちが知らない事情がまだ隠れているようだ。ここはマグス^{ボク}の回復も兼ねて、また情報収集に戻るのはどうだろう」

「賛成だねえ。こんな状況でナイトメアやヴィランに襲われようものなら、さすがに分が悪すぎる。先に港に向かったピーターには悪いが、ここは数時間だけ隠れさせてもらおう。それだけあれば、図書館でシレネツタに掛け合える」

「今から向かう場所については、ナイトメア・キッドはあまり派手に暴れられない——いや、出現を嫌うだろうからね。少し安静にしておいてくれ」

ハンスはこくりと頷くと、マグスを自分の中から完全に追い出した。

立ち上がると、ぱんぱんとスーツの尻と裾を叩はたいた。トランクに空になった薬瓶を突っ込んで、一匹の蝶を指先に呼び寄せた。真っ白な蝶は、ハンスの指から離れるとはたはたと道を先行していく。

「これで準備はよし、と。……さて、目指すのは孤児院及び、アイアン・フックの船だ」

第6章 ウェンディの小さな不安

「あつ、ピンクのおにーさん！ こんにちは！」

「やあ、こんにちは」

ぶんぶんと手を振る男の子に、ハンスは笑顔で日傘を持つ手を振り返した。勢いあまって傘を取り落としそうになって、「おっと」と慌てて持ち手を手繰りよせる。「おにーさんうっかりー」などと笑う男の子に、「うっかりじゃなくてお茶目なのさー」なんて答えていた。

白塗りされた壁が目眩しい建物だった。二階立ての横に長い民家のように、両開きの大きな扉の上に孤児院の看板が下げられている。

ハンスは男の子と目線を合わせるようにしやがみこんで、首を傾げる。

「ウェンディは今居るかな？」

「いるよー。おにーさん、ウェンディにーごよーじ？」

「うん、ご用事。この街のことで、少しお話を聞きたくてね。案内、頼めるかい」

「まかせて！」

男の子はえっへんとはかりに胸を張り、ハンスの前を先導して駆けていく。ハンスも

その後を追って、建物の中に入った。玄関マットに靴の底を押しつけ、パチンと指を鳴らすと、畳んだ日傘があつという間にトランクへと変わる。

内装は孤児院の割にはしつかりしていた。床には所々足跡がついていたり、壁にはラクガキの跡もあるが、それは新しくつたり掃除をされる途中だったりする。蜘蛛の巣が張つたり、床が軋んだりはしていない。さすがピーターのアジトを兼ねているだけであつた。

「ウエンディー！ おきやくさんつれてきたー！」

ノックも早々に男の子がガチャリ、扉を開けた。

一見してみれば、何ら変哲もない一室だ。ちよつとした絨毯が敷かれた床に、壁にはポスターだったり子どものお絵描きだったり貼られている。ただ、その隅にはカーテンで仕切りの作られた空間があつて、そこだけがある意味異質に見えた。カーテンの間からはベッドの足が覗いている。

さて、彼が探していたウエンディーは机に向かつて、裁縫をしている最中だった。扉を開けた男の子と、その後ろで帽子を脱いで会釈するハンスを目にすると「あら」と声を上げる。

「本当にキレイなピンク色……あなたよね、ゴロツキに襲われていた子を助けてくれたの」

「はは、話が早くて助かるよ」

孤児院のアレコレを手伝っているだけあって、子どもたちの噂は当然、彼女の耳にも入っていたらしい。どうぞと促されるまま、ハンスはウエンディの対面に腰掛けた。

案内をしていた男の子が「じゃあボク、あそんでくるー!」とトテトテ走っていく音。ウエンディは開けっ放しの扉から身をのりだして、「ちゃんと閉めないでダメでしょー!」と外に叫んでおいてから、パタリ閉め直し戻ってきた。

「ごめんなさいね、騒がしくて。あの子、何か粗相はやらなかったかしら?」

「とつても元気に案内してくれたとも。子どもつてのは元気でナンボだからね……気にしないで」

差し出された紅茶のティーカップを「どうも」と受け取りながら、ハンスは答える。容器から角砂糖を三個ワンセットで入れて、混ぜて味を確かめ、さらに追加でぽとぽと入れていく。ウエンディは子どもたちにやるようにデコピンして寤めたくなるのを、必死に堪えているようだった。

「……ミルクも必要かしら?」

「そうだね、もらえらるとつても嬉しいな! ふふ」

ウエンディの胸中など露知らず、にこにこハンスは笑うと「さて」と切り出した。

「ボクが来たのは、ピーターのことと気になることがあったからんだけど……ちなみ

にキミ、今は話をしていて大丈夫かな？」

ハンスの視線が部屋の隅に向けられていることに、ウエンディはすぐに気が付いたらしい。「大丈夫よ」と頷いた。

「あの子もご飯を食べてぐっすり寝ているところだから……それで、ピーターのことよね？　実はピーター、最近孤児院に帰ってきていなくて。詳しいことは私も知らないの」

「心当たりはあるかい？　見たところ、ティンカーベルも傍に居ないようだね」

「ああ、あなたは知らないのね、少し前にあった事件のこと」

「事件？　子どもの連れ去り未遂事件じゃなくって？」

「それよりも前にあった事件よ。……この街に恐ろしい怪物が現れたの」

「！　それって」

きらり、とモノクルのレンズが光る。恐ろしい怪物といえ、それは間違いなくヴィランのことだろう。

早くも舞い込んできた情報に、思わず軽く身を乗り出してしまったのを押し留めて、手元に出来上がったすさまじく甘いミルクティーを口に運ぶ。砂糖の甘さが長く尾を引く。

「どうにか怪物自体は退治出来ただけ……フック船長やロストボーイズの何人か

は怪我をして、ティンカーベルも力の使い過ぎてまだ寝ているくらいなの」

（そうか、この世界には人魚姫の二人は居ないから——）

ウェンディの言葉を聞きながら、ハンスは一人思考を巡らせる。

そう、今回ハンスが訪れているのは『ピーター・パンの物語世界』だった。本来、『ピーター・パンの物語世界』は『人魚姫の物語世界』と重なって存在しているのがメインの解釈——基本的な成り立ちなのだが。

（偶にこういう、イレギュラーな世界も存在しちゃうんだよね。だからこそ、ボクたちにこういう仕事回ってくるんだけど）

「随分な大事件だったんだね？」なんて返しながら、「それじゃあ、あそこで寝ているのは」と再び視線を部屋の隅に向けた。彼は考え事をしながらも、子どもが怪我をして寝ているという事実、どうにも落ち着かない物を感じていたのである。

「あの子は騒ぎに乗じて悪さをしようとした悪党に撃たれてしまったのよ。肩を撃ち抜かれただけだから、命に別状はないのだけれど。ほら、ピーターって、あれで結構責任感が強いから」

「帰ってこないのはその所為じゃないか、って？」

辛勝を割り切ることは、なかなか大人びた行為だ。身近な人間に被害が及んでいると
もなれば尚更。

ウエンデイが頷く姿に、ハンスは納得しながら紅茶を一口。甘い上澄みを吸った後の紅茶は、もはや砂糖味の紅茶と表現すべき代物だった。

強く視線。ハンスが顔を上げると、ウエンデイの緑の瞳と見事にち合った。

「あなたはピーターと事件を追っているのよね？ それなら、ピーターが無茶をしないように見張っておいてくれないかしら」

「伝えてくれ、じゃない辺り、キミはピーターの扱いに慣れているようだね？」

「ピーターだけじゃなくって、この孤児院の子どもたちなら一通りね」

ソーサーにカップが置かれる、カチャリという音。桃色をした睫毛が、につこりと笑みを描いた。

「そういうことなら任せてよ！ ボクも子どもは好きだからね、きつと力になれると思うんだ」

軽く胸を張って、得意げなハンスにウエンデイは一言。

「……逆に心配になってきたわ」

「どうしてだい!？」

ハンスを見るウエンデイの瞳は、どう見繕っても『手のかかる子ども』を見る時のそれだったのだった。

*

『癒しのメロディをどうぞ♪』

呪文の詠唱と共に、太腿に空いた風穴が塞がっていく。穴に魔力が満ち満ちて、ペー
ジがそこを覆って、最後には傷があつた痕跡は衣装についた青いインクだけになった。
マグスは足をふりふりとして動作を確認すると、「感謝するよ」と指先までピンつと空に
伸ばす礼をした。

今、マグスの目の前には空中をふよふよとしている人魚が居た。ヒレの周りには水飛
沫のようなものが見えるが、それを込みでも宙に浮いている。なんとも不思議な光景だ
が、図書館の中ではまったくの日常だった。

緑の髪をゆらゆら揺らして、シレネッタは人懐っこく笑う。

「気にしないで、怪我した人を癒すのは私の役目だもの！ でも……そんな傷、何処で
作ってきたの？ 修練場なんかで負った傷は、戻ってくれば全部治るはずでしょ？」

「ふふつ、それはナイシヨにしておこう。だってほら、そっちの方が道化師らしい！」
抑揚高く言い切って、カラカラと馬鹿笑いするマグスに、シレネッタは何とも言えな
い顔をしていた。心配ではあるが、口論をしてまで聞き出したい訳でもない。

このマグス・クラウンという人のことを、シレネッタはよく知らないでいた。いや、そ
もそも知っている人は居るのだろうか。そんな訳で今回の治療も、『顔見知りが困つて
いたから助けた』くらいの物だったのであつた。

これを機に、少しでもこの人に近付いてみようか。この時シレネッタの心にもたげたのは、そんな好奇心だった。

「ねえ、マグスさん。あなたって、音楽を作ったりはする？」

「……ああ、作曲ならよくやるよ。趣味と言っても過言じゃあない」

返答に、一拍間があつた。

シレネッタの好奇心は、生憎とマグスにとつては迷惑もいところだった。今回の事件を追う限り、ナイトメアとの再戦は必ず起こり得る。それに対する対抗策を見つけないことには、うかうかハンスを調査に出せない。一人笛を吹きながら、あれこれ策を巡らせたいところだったのだ。

そんな事など微塵も知らないシレネッタは、「やつぱり？ 私も曲を作るの好きなんだ！」とパアと顔を輝かせる。

「元々ある曲を歌うのもいいけれど、自分で新しく作るのは、まったく違う楽しさがあるんだよね。マグスさんは、最近どんな曲を作ったの？ 私、聴いてみたいな！」

マグスは少し悩んで、ここは一つ強硬手段に出ることにした。

「おやおや良いのかい、人魚姫のシレネッタ？ ボクの音を聞きたいなんて言っちゃつて」

口角を吊り上げて、目元を妖しく笑わせる。ピエロの表情、誰かを嘲る時に張り付け

る仮面。

そのまま前屈気味に、陰った顔を下から覗かせるようにすれば、あつという間に不審人物の出来上がりだ。

「ボクの物語は『ハーメルンの笛吹き男』——聞いてしまったら最後、好き勝手に操られてしまうかもしれないよ?」

あまり図書館で騒ぎを起こしたくないが、何、演技だったといえば大体のことはどうにかなる。彼には仲の良いキャストという者が居なかったが、だからこそ気楽だった。誰も彼もが『隣人』だからこそ全てを、『嗚呼、あの人はよく分からないから、そういうことをすることもあるさ』で済ませてもらえる自信があつたのだ。

シレネッタは目をパチクリとさせた後、ぽんつと手を叩いた。

『フォーミイチャソング』のコアの近くで聴けば、多分大丈夫!」

「……いやいや、そういう問題じゃあないだろう? そこは」

これはダメなタイプの相手だ、演技が良くも悪くも通じないタイプだ、と。諦め半分にため息を吐いた、その時。

マグスの脳裏に、音が弾けるような感覚があつた。一般的に言えば、

「そうか! 閃いたぞ!」

「? 新しい曲でも出来たの?」

「これはまた違う閃きさ。シレネツタ、キミの『フォーミイチャソング』のコアだけれど——」

＊

船から降りたハンスは、日傘と共に道に行く。視線除けの日傘のお陰か——気休め程度に他人からの注目を反らす魔法が掛けられている——あれ以来、どうにかナイトメア・キッドには遭遇しないで済んでいる。港の照りつく陽射しも遮ることが出来て一石二鳥だった、黒いスーツが黒い傘をさしている姿は、パツと見酷く怪しげだ。

それが今、突然「やあ、マグス？」などと独り言を始めたのだから、これはいよいよもって不審者と形容せざるを得なかった。彼ら自身、自分たちの異常な風貌を理解していない訳ではなかったのだが。

「その様子だと、治療はもう済んだのかな」

遠くから聞こえてきた声に、ハンスは穏やかに微笑み頷いた。

「こっちも大丈夫だよ、うん。アイアン・フックとは会えなかったが、代わりにスミーに話をつけてきた。いやあ、ウエンデイの方から回って正解だったよ。彼女が一筆、紹介状を書いてくれたんだ」

革靴の底が地面を叩く。足音を隠さず、歩みは迷わず、目的地へと一直線へ向かっていく。

「ああ、これで準備は万端だ。それじゃあ、行こう」

日傘をぼいっと宙に投げた。一転二転、くるくると回る内に傘の輪郭は溶けて、最後にはトランクにすり替わった。宙を浮くそれに、ステップを踏んで飛び乗る。翔けさせる。海風に吹き上げられそうになるシルクハットを、慌てて抑えた。

「ナイトメアの思惑も、ゴロツキたちの思惑も、ここで一旦引つ掻き回して、こつちのペースに乗ってもらおうとしよう。ボクたちは『そういうの』得意だからね！」

悪戯っぽく笑う声が、ウミネコの鳴き声に紛れていく。